慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	子どもたちの抱く「高齢者イメージ」：社会的表象理論の視座からの分析
Sub Title	Japanese children's images of aged persons : an approach based on the social representation theory
Author	村山, 陽(Murayama, Yo)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2007
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.65 (2007.) ,p.43- 54
JaLC DOI	
Abstract	Past research based on social cognition investigated the processes underlying perception formation. However, children's images of aged persons can be influenced by daily interactions with their grandparents. Therefore, this study examined children's perceptions of aged persons from the viewpoint of the social representation theory. A questionnaire (wherein the participants could freely describe their perceptions of aged persons and the nature of their relationships with their grandparents) was administered to l89 students in grades 5-6 of an elementary school. In order to consider various representations, data was collected using a formula questionnaire and analyzed using the text mining method. The results revealed that the interactions with grandparents innuence children's perception formation of aged persons.
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000065-0043

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

子どもたちの抱く「高齢者イメージ」

—社会的表象理論の視座からの分析—

Japanese Children's Images of Aged Persons

—An Approach Based on the Social Representation Theory—

村　山　　陽*
Yoh Murayama

Past research based on social cognition investigated the processes underlying perception formation. However, children's images of aged persons can be influenced by daily interactions with their grandparents. Therefore, this study examined children's perceptions of aged persons from the viewpoint of the social representation theory. A questionnaire (wherein the participants could freely describe their perceptions of aged persons and the nature of their relationships with their grandparents) was administered to 189 students in grades 5–6 of an elementary school. In order to consider various representations, data was collected using a formula questionnaire and analyzed using the text mining method. The results revealed that the interactions with grandparents influence children's perception formation of aged persons.

1. はじめに

わが国では，諸外国に比べて高い高齢者同居率を背景に，祖父母と孫の世代間交流が日常的になされてきた（吉田・冷水，1991)。しかし，核家族化の進展にともない家庭における世代間交流の機会が減少している。こうした現状において，少子高齢社会の到来にともない，地域における高齢者と子どもの交流が様々な分野で注目され始めている（金子，1995; 増山，2003; 厚生労働省，2003)。例えば，老人施設と児童施設とを併せた複合施設における世代間交流の取り組みや小学校や児童館における高齢者との交流プログラムの実施などがある（原，2005; 北村，2003a; 北村，2003b)。世代間交流には，子どもの高齢者理解や社会化といった効果が期待されている（關戸，2003)。

高齢者との交流が子どもに及ぼす影響を実証的に検討した研究はそれほど多くはないが，その中でも高齢者イメージに関する研究がなされてきた。青少年の高齢者イメージはアメリカで先駆的に研究され，12～13歳頃までに老いに対する否定的な態度が形成されることが報告された。日本では，この仮説をもとに小学生や中学生を対象にした調査研究がなされてきた（中野，1991b)。

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程（社会心理学–生涯発達心理学）

しかしながら，これまでの高齢者イメージ研究では，SD 法による形容詞対（例えば，弱々しい-たくましい）による評価（肯定的/否定的）が用いられてきたため，子どもの高齢者イメージの分析は限られ，高齢者イメージの生成と変化を説明する理論的根拠は示されてこなかった。

社会心理学領域では，認知心理学の理論や方法論を取り入れた社会認知的アプローチから，ステレオタイプ形成プロセスの情報処理モデルが示されてきた（唐沢，1998）。しかし，これまでの高齢者イメージ研究の知見を見る限り，祖父母との交流が子どもの高齢者イメージ形成に影響を及ぼしており，社会的な文脈を無視して，社会的認知の情報処理モデルからのみ説明することは不十分であるように思われる。そこで，本研究では，子どもの高齢者イメージ形成を社会・認知レベルから捉える新たな理論的枠組みとして社会的表象理論に注目する。

次項から，日本における高齢者イメージ研究とその問題点を概観し，高齢者イメージ研究の理論について検討する。

日本における高齢者イメージに関する研究とその問題点

高齢者イメージは，エイジズム（高齢者に対する差別）との関連から社会学を中心とした領域で検討されてきた（長谷川，1997; 船津，2003; 久和，2005）。日本における高齢者イメージの研究は多く，その対象も小学生，中学生，大学生，看護学生など様々である。小中学生を対象にした研究では，その結果は様々であるが，幼少期からの祖父母との交流が高齢者イメージに影響を及ぼすことが指摘されている（中野，1991a; 中野，1991b; 馬場・中野・冷水・中谷，1993; 中野・冷水・中谷・馬場，1994）。大学生を対象にした保坂・袖井（1988）の研究では，大学生は高齢者に対して否定的，消極的なイメージをもつことが示され，交流の内容が高齢者イメージに影響を与えることが明らかにされた。看護学生を対象にした研究では，看護学教育を検討する目的で，老人看護実習前後の看護学生が抱く高齢者イメージの変容が検討されてきた（西川・中野・丁野・吉田，1994; 中村・服部・横島，2002; 小川・深江・三輪・今福，2002）。結果は，総じてネガティブなイメージからポジティブなイメージへの変化を認めている。また，学生の日常生活での祖父母との関係性が，看護学生の高齢者イメージに影響を与えていることが報告されている[1]（梶谷・倉鋪，2000; 小川他，2002）。

高齢者イメージの測定法に関し，これまでの高齢者イメージ研究では，SD 法や老人観スケールがよく使用されてきた（中野，1991a; 中谷，1991; 保坂・袖井，1988; 小川他，2002）。しかし，この方法では，高齢者イメージの内容まで深く分析できないという限界がある。実際に，形容詞対による測定では，どのようなイメージがポジティブイメージで，どのようなイメージがネガティブイメージか曖昧であることが，問題点として指摘されている（小川・斉藤，2006）。例えば，「元気な-疲れた」という項目は，精神的イメージに加えて，身近な高齢者の身体的イメージを想起している可能性もある。また，既存の尺度では，社会の変化によるイメージの変化が捉えられないことも指摘されている（藤井，2003）。他に，高齢者イメージに関する質的データを KJ 法により分類する方法が用いられているが，この方法も，客観性や再現可能性という問題が指摘されている（小川他，2006）。

高齢者イメージ形成の理論

これまで，社会心理学では，「社会的認知」と呼ばれる研究領域において，自己や他者，集団，社会的出来事に関する情報処理過程に焦点が当てられ，認知心理学の理論や方法論を取り入れたモデルが検討

されてきた。社会的認知では，「特定の集団に属する人々の特徴についての心理的表象」は，ステレオタイプと呼ばれ，その形成過程（ステレオタイプ化）の研究がなされてきた（唐沢，1998)。ステレオタイプ化は，認知による自動的な処理と関係し，情報処理の認知負荷を軽減する道具として捉えられる。

これに対し，認知的情報処理アプローチからステレオタイプ形成を説明することは不十分であり，ステレオタイプ形成の社会的な過程（時が経過する中でどのように意味が抽出され，構築されて発展してきたか）を考慮すべきであるとの指摘もみられる[2] (Craig, Vincent, Yzerbyt, & Russell, 2002)。確かに，これまでの先行研究の知見では，祖父母との日常的な関係性や幼少時の交流経験が，高齢者イメージの形成に大きな影響をもたらしていることが示されている。そのため，子どもの高齢者イメージ形成を「社会的」，「心理的」視点から説明する新たな理論が必要となる。

そこで，本研究では，子どもの高齢者イメージ形成を社会・認知レベルから体系的に捉える理論的枠組みとしてフランスの社会心理学者 Moscovici により提唱された社会的表象理論に注目する。社会的表象とは，ある文化，社会階層，集団に共有された知識であり，環境の認識や個人・集団の行動，コミュニケーションを方向づけるものとされている[3] (Moliner, 2005)。社会的表象理論に従えば，人は社会的表象を通じて自身の認識を構成すると同時に，社会的表象の変化と再形成に貢献していることになる。言い換えれば，この理論において，人は「社会的」・「心理的」に捉えられる[4] (Burr, 2002)。近年では，社会的表象のダイナミックな変化を捉えるために，Abric (2003) が核理論 (La théorie du noyau) を提唱している。この理論では，中心核 (Noyau central) と周辺システム (Systèm périphérique) という社会的表象の構成要素を想定している。中心核とは，表象の基本的要素となるもので，規範，価値観，期待などと結びつく安定的で抽象的なイメージのことである (Figure 1)。周辺システムとは，中心核を決定づける補助的な要素で，個人間で異なる柔軟的で具体的なイメージのことである。Figure 1 が示すように，周辺システムが，社会変化に応じて表象の中心核となる可能性も指摘されている (Seca, 2005)。この理論により，社会的表象のダイナミックな動きを捉えることが可能となった (Moliner, 2001)。そして，現在のヨーロッパの社会心理学では，表象の変化を捉えるために様々な研究法が生み出され，社会問題の解決や予防に応用する試みがなされている[5] (Abric, 2003)。例えば，Vergès は，Abric の核理論をもとに，連想語のプロトタイプ分析法を提案している。この分析法は，被調査者が連想した 5 つの語を，その出現頻度と出現順位 (1-5) の平均から，4 つのカテゴリー（1. とても頻繁に連想され，最初の方に挙げられる，2. とても頻繁に連想されるが，最後の方に挙げられる，3. あまり頻繁に連想されない

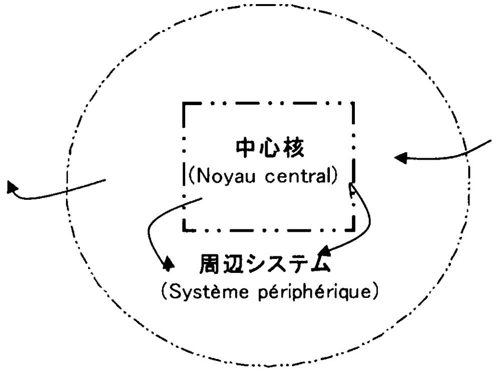

Figure 1　社会的表象の構造：Seca (2005), p. 74 より

が、最初の方に挙げられる，4. あまり頻繁に連想されず、最後の方に挙げられる）に分類し、カテゴリー1 に出現した連想語を表象の中心核，カテゴリー 4 を表象の周辺的要素，カテゴリー 2, 3 を新たに表象の中心核に変化しうる要素と想定するものである[6]。

2. 目　　的

本研究では，子どもが抱く高齢者イメージを「高齢者表象」として捉え、社会的表象理論に基づき，祖父母との日常的な交流が子どもの高齢者表象の形成に関係すると仮定した。そして，Abric (2003) が提唱する核理論 (La théorie du noyau) をもとに，日本の児童が抱く「高齢者表象」の構造（中心核と周辺システム）を明らかにすることを目的とした。なお，本研究では，祖父母との日常的な交流を捉えるために、祖父母との居住形態（同居、近居，遠居）に焦点をあてた。

3. 方　　法

本研究では，質的研究の問題点（分析の再現性や扱うデータ数の限界）を克服するために，テキストマイニングの手法を用いる[7]。テキストマイニングとは、テキストデータ（言葉や文章）から有用な情報・知識の発掘する手法である。テキストマイニングに特徴的な分析技術には，自然言語処理[8]，マイニング処理[9]，視覚化[10]が含まれる（那須川，2006)。本研究では、テキスト型データ解析ソフト「WordMiner」（日本電子計算株式会社）を用い、自由記述から高齢者イメージを抽出し、そのデータをもとに分析を行う。

調査対象者　本調査の回答者は，埼玉県内の 1 つの公立小学校の児童 5〜6 年生計 189 名であった。高齢者（祖父母）との場所の近接さの内訳は，同居 58 名，近居 62 名，遠居 66 名，その他 3 名である。全回答者 189 名のうち，調査項目への回答に著しい欠損がある回答者 11 名を除外した 178 名が有効回答者となった（同居 56 名、近居 58 名、遠居 61 名)。

調査時期　2006 年 9 月下旬

調査方法　本来なら、自由連想法によるデータ収集が望ましいが，本研究では質問紙調査形式で実施した。小学校 5, 6 年生の教室内にて各クラス担任の指導のもとに，集合調査形式で実施された。回答依頼時には、この小学校の教頭先生から、文書と口頭で説明合意を得ている。謝礼の支払いはなかった。回答はいずれも無記名で行われた。

調査内容　本調査の質問紙は，社会的表象理論をもとに Moliner らが開発した質問紙をもとに作成した (Moliner, Rateau, & Cohen-sali, 2002)。本質問紙における教示文とその回答は非常に簡潔であるために、テキストマイニングの手法にも適していると考えた。

1)　フェイスシート

性別，学年，祖父母との居住環境（同居，近居，遠居）を回答させた

2)　高齢者イメージ

子どもが抱く高齢者の表象を知るための質問である。「《お年寄り》と聞いて思いうかべる言葉を 5 つまであげてください。」と質問し、順に言葉を記入させた。

調査手続き：児童の自由記述から「高齢者イメージ」を明らかにするために、「お年寄りとは」に対する自由記述の質的データ解析を「WordMiner」を使用し，テキストマイニング手法により実施した。自由記述から得られたテキスト型データを分かち書きし、構成要素を抽出するために，記号，助詞，句読点

を除いた。さらに，解析対象の構成要素を整理するために，同義語や類義語を1つの言葉に置換する作業を行った。例えば，猫背，腰が悪いなどは「腰が曲がっている」に，お年玉，お金などは「おこづかい」に置換した。

4. 結　　果

テキストマイニングによる「高齢者イメージ」自由記述の解析

本研究では，祖父母との居住形態（同居・近居・遠居）を質的変数，児童が抱いた高齢者イメージを構成要素変数としてその関係を分析した。分かち書きのあと抽出された構成要素は1124，句読点，助詞，特殊記号を除いた後の要素は805，さらに同一語の置換を行った。例えば，閾値2以上の構成要素は618であった。最も出現頻度の高かったものは，「やさしい」であり，74回出現した。「高齢者イメージ」の構成要素と質的変数のクロス表（閾値2以上）をTable 1に示す。

「高齢者イメージ」と「居住環境」との関係

以上で得られた構成要素の中から，頻度2以上の構成要素（閾値＝2以上）を対象に，高齢者との居住環境（同居・近居・遠居）との対応分析を行った。対応分析の際に抽出された成分の累積寄与率は66.13％であった[11]。対応分析の布置図はFigure 2に示す。その結果，同居の近くに布置する高齢者イメージ群，近居の近くに布置する高齢者イメージ群，遠居の近くに布置する高齢者イメージ群，原点近くに布置する高齢者イメージ群の4群がそれぞれ視覚的に見いだされた。そのため，対応分析で得た成分スコアをもとにクラスター分析を行い，4つのクラスターに分類した(Table 2)。クラスター1には357，クラスター2には54，クラスター3には75，クラスター4には72の高齢者イメージが含まれていた，χ^2検定を行ったところ，有意な頻度の比率の偏りが示された($\chi^2=458.61, df=3, p<.01$)。

クラスター1には，60歳，一人暮らし，おじいさん，おばあさん，やさしい，腰が曲がっているといった高齢者の全体的なイメージ（人物，行動，性格など）を表す構成要素が示されたため，「高齢者全体像」と名づけた。クラスター2は，お茶，メガネ，散歩といった高齢者に関連する物を表す要素で捉えられているため，「高齢者の身の回り品」とした。クラスター3は，おしゃべり，おもしろい，耳が遠い，早寝早起き，元気，足が不自由などの高齢者の行動・性格特性を示す要素で構成されているため「高齢者の行動・性格的側面」と命名した。クラスター4は，戦争，年金，病気，老人ホームといった高齢者の社会的な側面を捉えている要素が示されているため「高齢者の社会的側面」とした。

構成変数（高齢者イメージクラスター）と質的変数（居住環境）のクロス集計表をもとにした等頻度検定を行った(Figure 3)。その結果，遠居群は，「高齢者の身の回り品」（クラスター2）を，他の群よりも多く想起していた($p<.01$)。近居群は，「高齢者の行動・性格特性」（クラスター3）を，他の群よりも多く想起していた($p<.01$)。同居に関しては「高齢者の社会的側面」（クラスター4）を，他の群より多く想起していた($p<.01$)。Figure 3が示すように，「高齢者の全体像」（クラスター1）は，すべての居住環境で多く想起されていた。

「高齢者全体イメージ」の構造

Figure 3が示すように，「高齢者全体像」（クラスター1）は，あらゆる児童が多く想起する傾向が見受けられた。そのため，「高齢者全体像」（クラスター1）で示されている高齢者イメージが中心核となるのではないかと予想し，その構造を明らかにする目的で，ウォード法，平方ユークリッド距離によるクラスター分析を実施した。結果のデンドログラムをFigure 4に示す。ユークリッド距離は15で切断し

Table 1 構成要素と質的変数のクロス表（閾値２以上）

構成要素	総数		遠居		近居		同居	
	度数	比率(%)	度数	比率(%)	度数	比率(%)	度数	比率(%)
やさしい	73	12.01	24	11.94	29	12.34	20	11.63
白髪	39	6.41	13	6.47	15	6.38	11	6.40
つえ	42	6.91	16	7.96	14	5.96	12	6.98
腰が曲がっている	29	4.77	9	4.48	12	5.11	8	4.65
おじいさん	28	4.61	8	3.98	11	4.68	9	5.23
おこづかい	27	4.44	11	5.47	8	3.40	8	4.65
しわ	27	4.44	8	3.98	12	5.11	7	4.07
元気	27	4.44	7	3.48	14	5.96	6	3.49
おばあさん	26	4.28	8	3.98	10	4.26	8	4.65
入れ歯	24	3.95	11	5.47	8	3.40	5	2.91
メガネ	23	3.78	13	6.47	8	3.40	2	1.16
年金	22	3.62	6	2.99	6	2.55	10	5.81
老人ホーム	19	3.13	2	1.00	6	2.55	11	6.40
物知り	17	2.80	8	3.98	5	2.13	4	2.33
不自由	16	2.63	3	1.49	10	4.26	3	1.74
耳が遠い	14	2.30	3	1.49	7	2.98	4	2.33
目が悪い	14	2.30	6	2.99	6	2.55	2	1.16
敬老の日	13	2.14	3	1.49	5	2.13	5	2.91
農業	10	1.64	3	1.49	5	2.13	2	1.16
早寝早起き	9	1.48	2	1.00	6	2.55	1	0.58
戦争	8	1.32	2	1.00	2	0.85	4	2.33
料理が上手	8	1.32	4	1.99	2	0.85	2	1.16
髪がない	7	1.15	2	1.00	1	0.43	4	2.33
散歩	6	0.99	3	1.49	3	1.28	0	0.00
病気	6	0.99	1	0.50	1	0.43	4	2.33
車いす	6	0.99	4	1.99	1	0.43	1	0.58
保健	6	0.99	2	1.00	2	0.85	2	1.16
おしゃべり	5	0.82	1	0.50	4	1.70	0	0.00
おもしろい	5	0.82	2	1.00	3	1.28	0	0.00
買ってくれる	5	0.82	1	0.50	1	0.43	3	1.74
畑	5	0.82	1	0.50	3	1.28	1	0.58
畑仕事	5	0.82	1	0.50	0	0.00	4	2.33
歩くのが遅い	5	0.82	1	0.50	3	1.28	1	0.58
お茶	4	0.66	3	1.49	1	0.43	0	0.00
大切な人	4	0.66	3	1.49	1	0.43	0	0.00
1人暮らし	3	0.49	1	0.50	1	0.43	1	0.58
60歳	3	0.49	1	0.50	1	0.43	1	0.58
お手玉	3	0.49	0	0.00	3	1.28	0	0.00
こわい	3	0.49	1	0.50	0	0.00	2	1.16
笑っている	3	0.49	1	0.50	1	0.43	1	0.58
足が不自由	3	0.49	1	0.50	2	0.85	0	0.00
年を取っている	3	0.49	1	0.50	2	0.85	0	0.00
髪の毛	3	0.49	0	0.00	0	0.00	3	1.74
合計	608	100.00	201	100.00	235	100.00	172	100.00

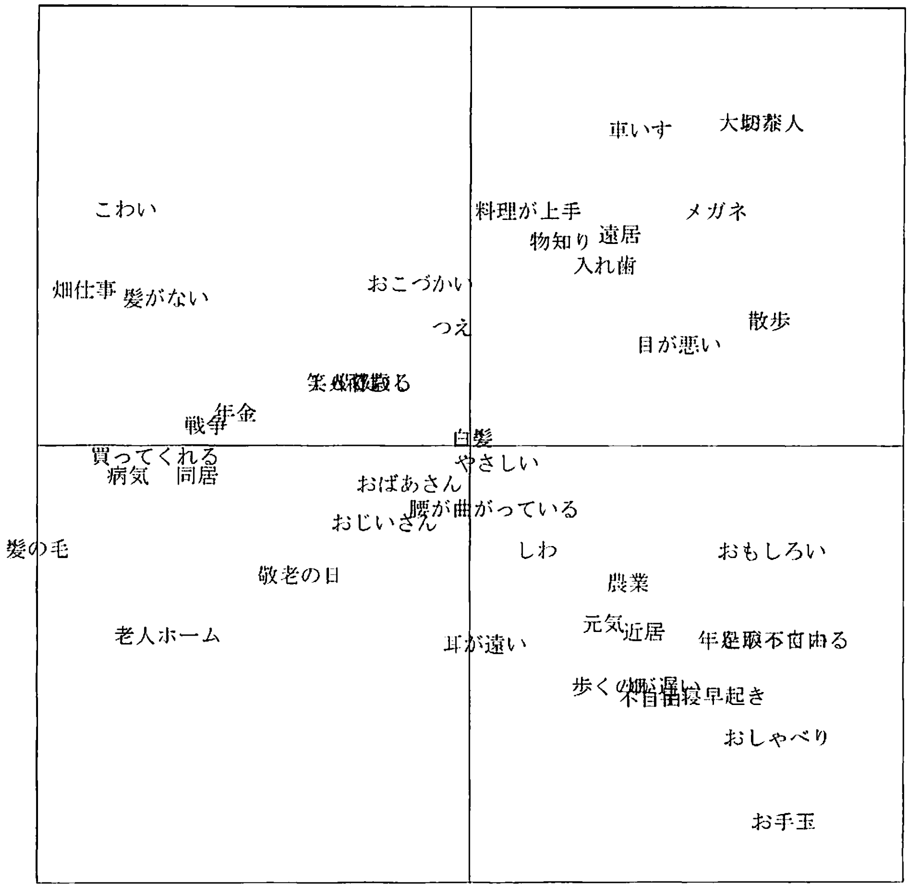

Figure 2 サンプル別の構成要素変数の成分スコア布置図

Table 2 クラスターの構成要素リスト

クラスター1	クラスター2	クラスター3	クラスター4
1人暮らし	お茶	おしゃべり	こわい
60歳	メガネ	おもしろい	戦争
おこづかい	散歩	お手玉	年金
おじいさん	車いす	元気	買ってくれる
おばあさん	大切な人	耳が遠い	畑仕事
しわ		早寝早起き	髪がない
つえ		足が不自由	髪の毛
やさしい		年を取っている	病気
敬老の日		農業	老人ホーム
腰が曲がっている		畑	
笑っている		不自由	
入れ歯		歩くのが遅い	
白髪			
物知り			
保健			
目が悪い			
料理が上手			

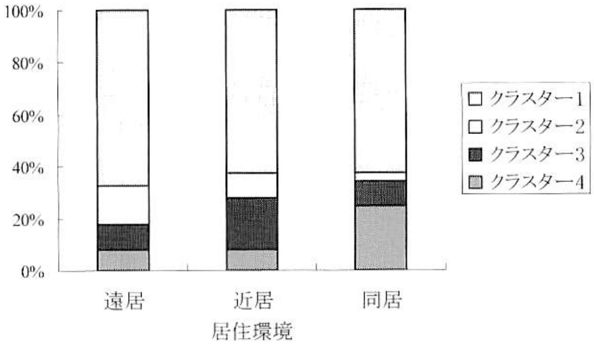

Figure 3 居住環境別に見るクラスターの出現頻度

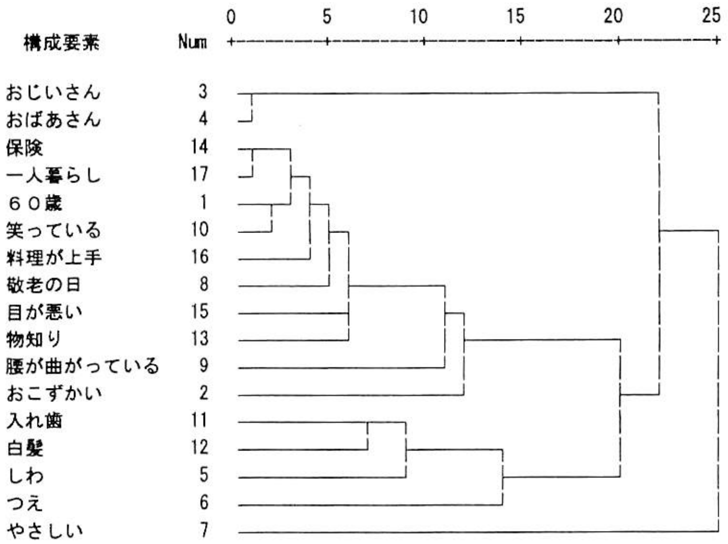

Figure 4 クラスター1「高齢者全体像」内のデンドログラム

たところ，4つのグループに分類された。グループ1は，おじいさん，おばあさんという特定の人物のイメージが示された。グループ2は，保険，一人暮らし，60歳といった高齢者の社会的な側面が示された。また，目が悪い，腰が曲がっているといった高齢者の身体的衰えと，笑っている，物知り，料理が上手，おこづかいといった高齢者から受ける援助的側面から構成された。このことから，高齢者を，「保護される存在」であると同時に「援助をしてくれる存在」として位置づけていると考えられる。グループ3では，入れ歯，白髪，しわ，つえといった高齢者の外観が示されていた。グループ4では，やさしいという高齢者の性格特性が位置づけられていた。

5. 考　　察

本研究では，祖父母との日常的な交流と子どもの「高齢者イメージ」との関係を明らかにすることを目的とした。テキストマイニングによる自由記述データ解析から，児童の高齢者イメージは，肯定的・否定的といった2項対立的なものではなく，祖父母との相互交流による表象として示された。また，児

童に共通して多く想起された高齢者イメージと，祖父母との居住環境に応じて想起された高齢者イメージという２つの構成要素が見出された。

社会的表象理論のパースペクティブから見ると，児童が共通して多く想起した表象は，子どもたちが抱く高齢者表象の「中心核」，祖父母との居住形態に応じて見られた表象は，高齢者表象の「周辺システム」としてそれぞれ解釈できる。高齢者の社会的表象の「中心核」には，「高齢者全体像」が見出され，「人物」「性格特性」「身体的特徴」「高齢者外観」「社会的側面」といった複雑な構成要素から成っていることが明らかとなった。また，興味深いことに，高齢者を「保護される存在」とする一方で「援助してくれる存在」という肯定的な表象が示された。これは，幼い子どもほど，祖父母との相互交流がなされるため，肯定的な高齢者イメージをもちやすいとする先行研究の知見と関係していると推測できる。

祖父母との居住環境に応じて見出された高齢者表象の「周辺システム」は以下のとおりであった。高齢者と同居している児童は「年金」，「戦争」，「老人ホーム」といった「高齢者の社会的側面」を多く想起する傾向が見られた。これは，日常的な祖父母との交流から，様々な高齢者に関する社会的な情報によく接しているためと考えられる。近居している児童は，「足が不自由」，「耳が遠い」，「元気」，「早寝早起き」，「おもしろい」といった「高齢者の性格・行動特性」を想起する傾向にあった。祖父母と近居している児童は，たまに会う祖父母から高齢者表象を形成しているため，高齢者の特有の行動を多く想起しやすいと考えられる。遠居している児童は，「メガネ」，「車イス」，「お茶」といった「高齢者の身の回り品」を多く想起する傾向にあった。祖父母と遠居している子どもは，日常的に祖父母に接する機会がそれほど多くないため，現実的な高齢者イメージに乏しく，近所の高齢者，メディアなどからの情報をもとに「高齢者表象」を形成しているため，高齢者に関わる物を想起したのではないかと考えられる。

以上の結果から，日本の児童の高齢者イメージは，高齢者の全体的な表象と祖父母との居住環境に応じて個々に認識された表象から構成されていることが明らかとなった。これは，日本に特有の居住形態（三世代同居）や他者との関係性（ウチとソトの関係）といった文化的な影響を示唆しているとも考えられる。

ただし，本研究では祖父母以外の高齢者や親が子どもに与える影響を捉えることはできなかった。今後，祖父母との交流があまりない児童を対象にして，祖父母以外の高齢者との交流や親と祖父との関係が子どもの高齢者表象に，どのような影響を与えるのか検討する必要がある。また，子どもが成長し，祖父母との相互交流が疎遠になるにつれて，どのような表象の変化が生じるのか縦断的に検討することが求められる。

本研究では，祖父母と遠居している児童が，特に高齢者に対するステレオタイプを抱いているということは示されなかった。また，過度にネガティブ・ポジティブな構成要素も抽出されなかった。これは，子どもの抱く高齢者イメージは，社会的認知の情報処理モデルのみから説明することは不十分であることを示唆するものである。つまり，子どもの高齢者イメージ形成には，祖父母との社会的相互作用が大きく影響しているため，社会的な文脈を考慮しなければならない。

少子高齢化が進む現代社会において，私達が日常的に高齢者と接触する機会はますます多くなっている。こうした状況の中で，今後どのような交流が高齢者・子どもの両世代にとって有用であるのか，実用面でのさらなる検討が必要であると考えている[12]。

6. 課　　題

まず第 1 の課題として，テキストマイニングの手法により得られた言葉が，必ずしも適切な意味を抽出できたか明確ではないことがある。というのも，一つの言葉は文脈に応じて様々な意味をもつからである。例えば，「元気なおじいちゃん」という言葉は，「身体的に健康な祖父」とも「精神的に元気な高齢者」とも解釈できる。そのため，研究者自身がテキストマイニングにより，テキスト本来が持つ意味を落としてしまう可能性を意識しなければならない。本研究に関しては，今後，児童を対象にインタビューを実施し，収集した質的データとテキストマイニングデータを，比較検討することを考えている。

第 2 の課題として，「高齢者表象」のダイナミックな変容を検討するができなかったことがあげられる。「社会的表象理論」では，社会変化に応じた認知構造の変化のプロセスを捉えることが理論の核となっている。例えば，日常的に高齢者との接触の少ない子どもが，老人ホームなどで高齢者と交流することで高齢者表象を変化させるとともに，高齢者に対する態度・行動を変容させることも考えられる。また，祖父母の介護や死別といったイベントが，子どもの高齢者表象を変化させることも考えられる。高齢者との交流場面を設定した実験を行うことで，高齢者に対する社会的表象と高齢者に対する態度・行動の変化を捉える必要があろう。

第 3 の課題として，視覚的には高齢者表象が確認されたが，統計的に高齢者表象の差異があまり認められなかったことである。サンプル数の不足や自由連想法ではなく質問紙調査法を行ったことが原因として考えられる。また，祖父母との居住環境以外の要因が高齢者表象の形成に大きく作用していることも考えられる。今後，大規模なサンプルから，「高齢者」の自由連想および個人属性を組み入れた質問紙構成による再検討が求められる。

注

1) 小川他 (2002) の研究では，看護学生と祖父母の家族構成から，同居群と別居群に分け，入学時の高齢者イメージと老人看護実習後の高齢者イメージの変化を検討している。その結果，入学時の段階で，祖父母と同居群では「依存的」なイメージが強く，別居群では「自立的」なイメージが強く見られた。さらに，別居群の看護学生の高齢者イメージが抽象的なものから，実習後にはより具体的なイメージに変化することが示された。
2) Burr (2005) は，社会的認知領域における個人主義的，内的-心理的アプローチに対し，社会的文脈を無視して人の行動を説明することは不可能であると主張している。
3) 表象の形成されるメカニズムには，物象化 (objectivation) と係留 (ancrage) と呼ばれるプロセスが提案されている (Seca, 2005)。物象化とは，馴染みのない新しい考え方や概念が社会的に共有される表象に変容する過程を指す。係留とは，新しい対象が個人の思考システムの中に類型化され命名される過程を指す。例えば，「エイズ」という新奇な事象が現れた際，人々は生物学研究によりエイズが解明される以前に，自身の知見や経験から「エイズ」を様々に解釈していたことが報告されている (Jodelet, 1989)。
4) 社会的表象論の研究者たちは，社会的表象を捉えるために面接法や自由連想法を研究法として使用してきた。例えば，Jodelet (1989) は，精神病患者が住むようになったあるフランスの村の住民が患者たちの抱く表象の変化を会話分析により分析し，精神病患者に対する表象の変化を明らかにしている。また，自由連想法を用いた研究では，被調査者に呈示したある言葉や短いフレーズに関して連想される 3, 4 の言葉を求め，それを内容分析や統計処理による分析がなされている (Moliner et al., 2002)。
5) 社会的表象論の研究者たちは，社会的表象を捉えるために面接法や自由連想法を研究法として使用してきた。例えば，Jodelet (1989) は，精神病患者が住むようになったあるフランスの村の住民が患者たちの抱く表象の変化を会話分析により分析し，精神病患者に対する表象の変化を明らかにしている。また，自由連想法を用いた研究では，被調査者に呈示したある言葉や短いフレーズに関して連想される 3, 4 の言葉を求め，それを内容分析や統

計処理による分析がなされている (Moliner et al., 2002)。

6) Vergès は,「お金」の表象を調査するために, 電話で「お金を思い出させる言葉や表現は何ですか？」と質問し, 3から5つの回答を求めた。全部で877の連想語を収集し分析した結果「仕事」や「生活の質」といった概念が中心核に布置されていることを見出し, さらに仕事-給料, 生活様式といった9つのカテゴリーに分類している (Moliner et al., 2002)。

7) テキストマイニングは, 価値観の多様化や時代の変化にともなう構成概念の変化を捉えることで計量化情報の不十分さを克服することが可能となることから, ビジネスやマーケティング領域で, 顧客ニーズの把握などに援用されてきた (三室・鈴村・神田, 2007)。近年では心理学や社会福祉学のような社会科学領域において, 人の行動や心の意識を量的・質的に捉える方法として用いられている。例えば, 小川・斉藤 (2005, 2006) は, 中学生に対する「心の教育」に関する授業の効果を質的データから捉える目的でテキストマイニングによる自由記述データの分析を実施している。藤井 (2003) は, 若者の死生観に関し, 大学生の「死」に対するイメージを構成する概念を抽出することを目的としたテキストマイニング法の手法よる分析を行っている。このように社会科学領域においてテキストマイニング法の手法が注目され始めた背景として, 質的データを分析する上で問題点となる研究者の主観性を抑えられる利点が挙げられる (小川・斎藤, 2006)。さらに, SD 法などの既存尺度では見出すことが難しい現代社会を反映したイメージを取り出せることがある (藤井, 2003)。

8) 自然言語処理とは,「自然言語」(通常私たちが用いている言語) をコンピュータで処理できるようにする作業であり, その基本的な技術として形態素解析がある。形態素解析とは, 一連の文字列を文法的に意味のある単位の構成要素に分解し, 各要素を分析の対象とする作業である (小杉, 2005)。例えば,「夫はパンを食べた」という文字列は,「夫」(名詞)「は」(助詞)「パン」(名詞)「を」(助詞)「食べ」(動詞語幹)「た」(助動詞)「。」(句点) とそれぞれに分けられる。

9) マイニング処理とは, 自然言語処理により抽出された構成要素間の「共変動」を数値化する多変量解析のプロセスである。質的変数を扱った多変量解析としては数量化Ⅲ類 (対応分析) があり, 質的変数から次元を (説明方法) を見出すことで質的データの内部構造を明らかにする。数量化Ⅲ類では, クロス集計表から得られる情報の総量である χ^2 値を分解することでデータを説明するルールを抽出することになる。

10) 視覚化とは, 言語表現だけでは理解できない分析結果を布置図やデンドロムといった図により明らかにすることを指す。

11) 寄与率とは, 各成文が元のクロス表の情報をどれほど説明しているのかを示し, 高いほどその成分が有効な情報をもっていることを示している (藤井, 2005)。累積寄与率は, 70～80%に達することが望ましいとする見解もある一方で, 多様なイメージを捉えるためにはなるべく低い閾値を採用したほうがよいとの指摘も見られる (小杉, 2005; 藤井, 2005)

12) 社会心理学研究の社会的実践は, 社会構成主義者らにより議論されているテーマでもある (Gargen, K., 2004; 吉森, 2002)。

引用文献

Abric, J. C. (2003). Pratiques socialiales et représentations. Presses Universitaires de France.

馬場純子・中野いく子・冷水豊・中谷陽明 (1993). 中学生の老人観—老人観スケールによる測定　社会老年学, 38, 3-12.

Burr, V. (2002). The person in social psychology. Psychology Presse. (堀田美保(訳) (2005). 社会心理学が描く人間の姿　ブレーン出版)

Craig, M. Vincent, Y., Yzerbyt & Russell S. (2002). Social, cultural, and cognitive factors in stereotype formation. In Craing, M., Vincent, Y. & Russell, S. (Eds.), *Stereotypes as Explanations: The Formation of Meaningful Beliefs about Social Groups*. Cambridge University Press. (有馬明恵・山下玲子 (監訳) (2007). ステレオタイプとは何か:「固定概念」から「世界を理解する“説明力”」へ明石書店)

船津衛 (2003). 高齢者の自我　辻正二・船津衛 (編) エイジングの社会心理学　北樹出版　pp. 41-55.

藤井美和 (2003). 大学生のもつ「死」のイメージ: テキストマイニングによる分析　関西学院大学社会学部紀要, 95, 145-155.

藤井美和 (2005). テキストマイニングと質的研究　藤井美和・小杉孝司・李政元(編)　福祉・心理・看護テキストマイニング入門　中央法規　pp. 14-26.

Gergen, K. J. (1999). An Inivation to social construction. Sage Publications of London, Thousand Oaks and

New Delhi. (東村知子(訳) (2004). あなたへの社会構成主義 ナカニシヤ出版)
原英二 (2005). ノーマライゼーション推進型地域統合ケアの推進 日本社会心理学会第 48 回公開シンポジウム発表要旨集, 6-7.
保坂久美子・袖井孝子 (1988). 大学生の老人イメージ-SD 法による要因分析 社会老年学, 27, 22-33.
井上正明・小林利宣 (1985). 日本における SD 法による研究分野とその形容詞対尺度構成の概念 教育心理学研究, 33, 253-260.
Jodelet, D. (1989). Représentation sociales : un domaine en expansion. In Jodelet, D. (Ed.), *Les representations socials* (pp. 47-78).
金子勇 (1995). 高齢化社会何がどう変わるか 講談社現代新書.
唐沢穣 (1998). 集団ステレオタイプの形成過程 山本真理子・外山みどり(編) 対人行動学研究シリーズ 8 社会的認知 誠心書房 pp. 178-195.
梶谷みゆき・倉鋪桂子 (2000). 看護学生の老人イメージに関する研究 島根県立看護短期大学紀要, 5, 102-107.
北村安樹子 (2003a). 幼老複合施設における異世代交流の取り組み ライフデザインレポート, 153, 4-15.
北村安樹子 (2003b). 福祉政策における世代間交流の視点 ライフデザインレポート, 156, 4-15.
小杉考司 (2005). テキストマイニングのからくり②—クロス集計表と数量化Ⅲ類— 藤井美和・小杉孝司・李政元(編) 福祉・心理・看護テキストマイニング入門 中央法規 pp. 60-71.
厚生労働省 (2003). 厚生労働白書(平成 15 年度版) ぎょうせい.
久和佐枝子・無藤隆 (2005). 孫との情緒的関係が高齢者の Well-Being に及ぼす影響 老年社会科学, 27, 190.
増山均 (2003). 子ども・高齢者問題と世代間交流の動向 早稲田大学大学院文学研究科紀要, 49, 81-94.
三室克哉・鈴村賢治・神田晴彦 (2007). 顧客の声マネジメント—テキストマイニングで本音を「見る」オーム社.
Moliner, P., Rateau, P. & Cohen-sali, V. (2002). Les représentation sociales: Pratique des études de terrain:Presse Université Rennes.
Moliner, P. (2005). Formation et stabilisation des représentations sociales. In Moliner, P. (Ed.), *La dynamique des représentations sociales* (pp. 15-41).
中村真理子・服部紀子・福島啓子 (2002). 老人看護実習後の高齢者イメージ—老人イメージマップからの連想言語から— 東海大学医療技術短期大学総合看護研究施設年報, 12, 2002.
中谷陽明 (1991). 児童の老人観—老人観スケールによる測定と要因分析— 社会老年学, 34, 13-22.
那須川哲哉 (2006). テキストマイニングを使う技術/作る技術—基礎技術と適用事例から導く本質と活用法 東京電機大学出版局.
西川千歳・中野悦子・丁野みどり・吉田正子 (1994). 看護学生の老人イメージに関する研究 (3)—老人看護学の展開と老人イメージの変化— 神戸市立看護短期大学紀要, 13, 98-106.
中野いく子 (1991a). 児童の老人イメージ: SD 法による測定と要因分析 社会老年学, 34, 23-3.
中野いく子 (1991b). 児童の高齢者観 月刊福祉, 74, 90-95.
中野いく子・冷水豊・中谷陽明・馬場純子 (1994). 小学生と中学生の老人イメージ—SD 法による測定と比較 社会老年学, 39, 11-22.
小川亜矢・深江久代・三輪眞智子・今福恵子 (2002). 看護学生の老人イメージに関する研究—入学時, 老人看護実習終了後の比較 静岡県立大学短期大学部研究紀要, 16, 57-64.
小川一美・斎藤和志 (2006). テキストマイニングによる中学生の自由記述データの探索的分析—個人特性および人口学的変数との関連から 愛知淑徳大学論集コミュニケーション学部(編), 6, 83-93.
Seca, J. M. (2005). Les représentation sociales. Armand colin.
關戸啓子 (2003). 高齢者とのふれあいに幼稚園・保育所が抱く幼児への期待 川崎医療福祉学会誌, 13, 195-200.
古森護 (2002). アナトミア社会心理学—社会心理学のこれまでとこれまで— 北大路書房.